



南伊豆が育んだ最速146キロ右腕

旅する球児・菊江龍

(朝日大)

岐阜学生リーグに所属する朝日大の菊江龍という投手をご存知だろうか。最速146キロのストレートをサイドから投げ込み、最終学年を迎えた今年はプロからも注目されるこの投手の出身校は下田高校南伊豆分校。秋田県出身で分校卒、岐阜・朝日大で頭角を現した異色の右腕の足跡を辿る。

白銀の故郷から新幹線・バスを乗り継ぎ、降り立った場所はすでに春だった。初めて南伊豆にやってきた15歳の菊江龍の目を奪った満開の河津桜。季節すら違ふということが、800キロ以上という数字よりも、移動にかかった時間よりも故郷からの距離をはっきりと教えてくれた。それが3年間の南伊豆での生活の始まりだった。

秋田県湯沢市(誕生・中学時代)

菊江龍は雪深い秋田県湯沢市に生まれた。「強く、逞しく育つように」という名前の由来通り、健やかに明るく成長していた菊江が野球に触れたのは小学1年の時だった。3歳上の兄が小学校の野球部に入り、菊江も兄の後をついて野球をするようになったという。小学4年になると野球部に入り、内野手や捕手としてプレー。湯沢南中でも野球部に所属し、1年時から内野手として試合に出場。2年生からは捕手を務めた。しかし、目立った戦績はなく、投手というポジションとも縁はなかった。

野球を始めるきっかけとなった兄が中学からハンドボールを始めたことで、菊江も中学入学時には野球とハンドボール、どちらをやるか悩んだ。「お兄ちゃんを追わなくてもいいんじゃない?」という母の助言を受け、どちらかというところ好きだった野球を選んだが、ハンドボールに心も残っていた。

菊江が中学生だった頃に開催された秋田わかずぎ国体では、兄の友人が高校ハンドボールの部で活躍するのを目の当たりにして、再びハンドボールにも惹かれた。高校ではハンドボールをやろうかとも考えていた菊江に訪れた転機は意外なものだった。

「母が仕事の都合で伊豆の熱川に行っていて、『こっちは雪が降らないから1年間ずつと野球ができるよ』って言われたんです。ハンドボールもいいなと思っていましたけど、それを聞いた時には、やっぱり野球だなんて思いました。そんな環境なら野球に打ち込めるな」と

母にあと3年間静岡にいてほしいと頼み込み、菊江は静岡の高校に入ることを決めた。「1年間野球ができる」という言葉に、野球で勝負したいという気持ちが湧き上がった。

ただ、「静岡といえは富士山」という程度の認識だった菊江の高校選びは難航した。調べた静岡県東部の高校には距離的に通えない高校もあれば、野球部がない高校もある。そして、親身になってくれた中学の担任の先生が見せてくれたのが、夏の大会前にスポーツ新聞各紙が行う全校紹介の下田高校南伊豆分校(以下南伊豆分校)の記事だった。

「部員不足で廃部危機という内容でした。そこからどういふ高校なのかなって興味を持って。実家が農家なのですが、南伊豆分校は園芸課。好きな農業も学べるし、人が少なければすぐに出来るかなとも思いました」

そして南伊豆分校を受験することに決めた菊江は、3月の入学試験で初めて南伊豆の地に立った。

静岡県賀茂郡南伊豆町(高校時代)

南伊豆分校の当時の野球部監督は木村幸靖氏(現掛川西監督)。20代半ばの青年監督は、掛川西高時代に甲子園出場経験も持っていた。

高校から野球を始める部員も多い南伊豆分校で、菊江は抜きこんでいたと木村氏は言う。「体は小さくて細かったけど、打球も速かった

し、良かったですね。南伊豆分校じゃなくても当然レギュラーになれる。県内で育った子であれば、他地区に出ていってもおかしくない力を持っていました」

入学後、菊江はすぐに三塁手として試合に出始めると、夏の大会でも三塁を守った。ただ、秋田から来た菊江にとって、静岡の夏は堪えた。開会式から意識が朦朧とし、「とにかく暑かった」という記憶がいまだに残る。

1年秋からは主に遊撃手を務めたが、マウンドにも上がるようになった。土日の練習試合をこなすために、投手の頭数を揃えることが南伊豆分校の急務だった。地肩が強い菊江に、木村氏が声をかけ、投手に挑戦させたのは必然だったともいえる。

「最初はど真ん中にしかいきませんでしたね。三塁手が捕って一塁に投げるような球で、球速でいえば100キロぐらいでした。上から投げていたんですけど、スライダーがけっこう曲がることに気付いて、木村先生に『それを生かしてサイドにしてみないか』と言われて。1年の冬頃から本格的にサイドになりました」

そしてその冬から菊江の土台が形成され始める。体が細い選手が多い南伊豆分校野球部で、菊江も例外ではなく、入学時の体重は40キロほど。その選手たちの体や食生活を見て、木村氏らが導入したのが食事トレーニングだった。

冬休みに校舎から自転車です15分ほどのグラウンドから13時頃に選手が戻ってくると、木村氏ら教職員たちが作った食事を食べさせる。その材料は選手たちが授業の一環で作った野菜であったり、近所の方々からの頂きものであったり。時には木村氏らが自腹を切ることもあった。

大量の食事に、当初は食べ終わるまで3時間

以上もかかった。しかし、その時間が縮むにつれ、選手たちの体つきも確実に変化した。この食事トレーニングは長期休暇の度に行われ、菊江も高校生活で30キロ近く増量。体重が増えるにつれ、投げる球も、打球も変わっていった。

* * * * *

冬が明けて、2年春には投手として公式戦に初登板し、夏の大会では先発もした。「準備しなくてもすぐ行けるし、必ず試合を作ってくれる。使い勝手がよかった」と木村氏が評する菊江の出番は多かったが、勝利は遠かった。将来も漠然と、郷里の秋田か、伊豆で就職することを一番に考えていた。しかし、2年冬に木村氏に進路の希望を聞かれた際、菊江は「一つ上のレベルで野球がしてみたい」と口にした。それから菊江自身も野球を続けることを意識するようになっていく。

2年秋からは主将も任せられた菊江だが、当時のことを木村氏は笑みを浮かべながら語る。

「菊江は野球も勉強も一生懸命で、人間性もいい。あいつが悪く言われているところを聞いたことがありません。野球部の同期は7人中5人が素人だったけど、一番できる菊江が手を抜かずに一生懸命やる姿を見ているから、周りも一生懸命になりましたね」

人も気候も暖かでのどかな南伊豆。野球部員たちも穏やかな子供が多かった。「集合時間とかは守るんですけど、歩くのとかすぐのんびりしてですね。南伊豆タイムっていうんですけど」と菊江も笑う。その選手たちの戦う姿勢も、菊江の存在によって少しずつ変化していった。

そして、3年夏には初戦の浜松日体戦で勝利。それは南伊豆分校にとって、3年ぶりの夏の大会での勝ち星だった。2回戦の富士宮北戦では

途中まで接戦を演じたが、終盤に菊江が長打を打たれて突き放された。

「悔しい思いはありました。自分が打たれて、勝てそうなところを完全に失ってしまった。でも、その時に、もっと野球がやりたい、もっとできるんじゃないかと思いました」

木村氏は菊江が3年になった春、掛川西に転任していた。それでも「野球を続けたい」と言った菊江のことは気にかけていた。菊江の進学先について当時掛川西の監督を務めていた佐藤光氏（現浜松西監督）に相談したところ、佐藤氏と慶應義塾大で共にプレーをした朝日大の林卓史監督に連絡をしてくれた。そして、夏の大会に訪れ、菊江を視察した林氏は、「指のかかりがいい投手だな」と好印象を抱き、菊江は朝日大のセレクションに参加することになった。

岐阜県瑞穂市（大学時代）

最後の夏にサイドから130キロ半ばを計時していた菊江に、木村氏は投手で勝負することを勧める。しかし菊江は打者を選び、遊撃手としてセレクションを受け、合格を勝ち取った。

伊豆から岐阜に移り住み、内野手として菊江の大学野球は始まった。しかし、打撃投手をしていた時の投球が目止まり、1年冬からは投手としての練習も並行。2年生になる直前の紅白戦で好投し、そこからは投手に専念することになった。

南伊豆分校の食事トレーニング

菊江、そして南伊豆分校野球部を変えた長期休暇中の食事トレーニング。部活の数が少ないため、部員数に比して野球部関係の教職員が多かったことから、木村氏を中心に交代で調理をした。「カレーや汁物をぶっかけた食べさせるものが多かったですね。豚キムチなんかも作ったんですが、肉が多いとコストが高くて…」(木村氏)

野菜や米は頂きものや、学校近くの道の駅で購入することで安く済ませることができたが、肉となるとそうはいかなかった。

そうやって苦心して作った食事の中には人気メニューもあれば、当然、選手の箸が進まなかった不人気メニューもあり、中でも香辛料を使ったグリーンカレーは不評だったとか。

「塩谷陽一先生が作ってくれて、僕はそれでグリーンカレーにハマって今でも好きなんです。でも選手たちは食べてくれませんでしたね」(木村氏)「そのへんで拾ったんじゃないかって葉っぱが浮いてて…。普通のカレーが良かった」(菊江)

大人と子供の味覚の違いなのか、好みなのか。量、コスト、メニューなど教職員たちにとって試行錯誤の毎日だったそう。

すぐにAチームに呼ばれ、2年春にはリーグ戦終盤で初登板、初先発も果たす。優勝を懸けた試合に登板し、悔しい負けも経験した。投手としてのキャリアを積み重ねていったが、3年春には不調に苦しんだ。思うような球が投げられず、リーグ戦のベンチを外れることすらあった。再びベンチ入りした春の最終戦、多くの4年生たちにとっては最後となる試合で登板した菊江は、自己最速の146キロを記録。しかし、試合には敗北し、4年生の引退を勝利で飾ることはできなかった。

「今考えてみると、この場面はこうした方がいいから初球はここに入ろうとか、自分にはできないことをしようとしていた。頭でっかちになつてたというか、考えすぎてたんじゃないですかね」

スランプに陥った原因をそう自己分析して、迎えた夏に掴んだものがあった。

「気持ちの部分なんですけど、打者と1対1で対戦することが大切だな。たとえば、打者が4番で走者が二塁だと1本打たれたら点が入る場面じゃないですか。以前はそれを気にしてた

下田南伊豆分校当時の投球フォーム



朝日大4年春の投球フォーム



菊江が語る独特なフォームの理由

僕は変化球が上手くないので、ストレートが多い。だから、サイドで、ストレートだけで勝負できている人を探していたんですけど、林昌勇（現三星）のストレートを見た時に衝撃を受けました。テレビや動画サイトで何回見たかわかりません。でもこの投手の真似をしても、自分がそんなにいい球を投げられるかっていうと、絶対にないと思ったんです。林監督が投球の仕組みや、メカニズムを教えるので、林昌勇の動画を見ながら、いいところや、自分にはできないところを探して、どんどん試した結果、身長がないので足を上げるフォームになりました。

「これを打たれたらしょうがないという球ではなく、本来なら一番得意なインコースのストレートが甘く入った投げミスでした。だから余計に悔しくて。リリーフは試合が決まる場面があるから辛いですね。自分がやらなきゃいけないっていうやりがいもあるんですけど」
サヨナラ安打を打たれたボールは自宅に持ち帰ると、『悔しさを忘れない』と書き込み、毎日、

心に刻んだ。

その後も優勝を信じて戦い続けたが、中京学院大戦の結果が響き、朝日大は2位でリーグ戦を終えた。

次なる目的地へ（現在と未来）

集大成となる秋にリーグ優勝し、全国大会に出ることが当面の目標だが、その先も見据えている。菊江は大学入学前から、大学でやるなら絶対に社会人、プロに進むと決めていた。「4年間も時間がもてるんだから、やるしかないと思っていました。プロには入りたいというか、行きたいですね。日本で一番上手い人たちがいるところで、自分がどこまで通用するか試したいというのがあります」

部員の確保にも事欠く南伊豆分校から、甲子園常連校や有名校の選手も集まる朝日大に入り、周囲のレベルは格段に上がった。それでも、菊江が落ち込んだり、自信を失うことはなかった。「ここは負けるけど、この部分なら勝てる」という前向きな考えで、自分を生かせる部分を見つけないで、そこを伸ばすために努力を続けてきた。

「勝てると思った部分も、他の人から見たら負けていたりする。その中で、活躍するとか上でやるためには、これしかないという武器、菊江龍にはこれがあるっていうのがあれば、使ってもらえるし、試合でも生きると思っています」

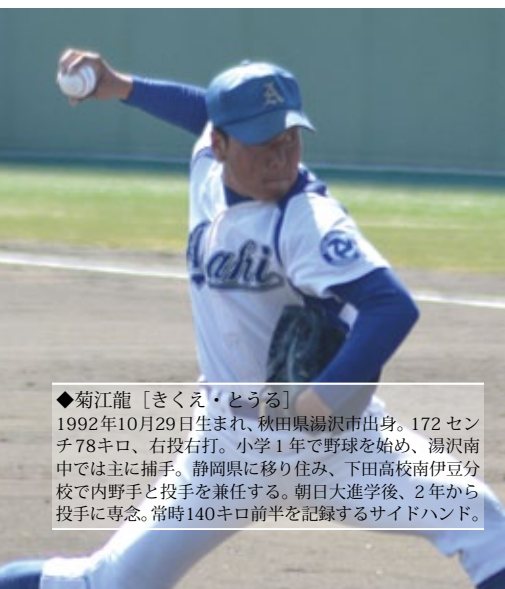
今は「一番の武器は？」と尋ねられれば、迷うことなくストレートと返答する。現在の最速は146キロだが、「150キロは出せると思っています」と今後の成長にも自信を滲ませる。「でもよく考えましたね。自分には何があるのかって。チームには148キロを投げるエー

スもいる。資料で見れば、こっちの方が速いと思いますよ。でも、ガンには出ない速さとか、打ってみたいとわからない球の質があるじゃないですか。実際に見た時に、菊江のストレートはすごいなと思わせたい。そこだけは負けれないし、こだわりを持っています。それしかないというか」

秋田から南伊豆、そして岐阜へと旅するようになりに野球を続けてきた菊江。その中で得た武器を右手に携え、来春には再び旅立っていく。

菊江を見守り続けてきた木村氏は、「あそこまで強いボールを放れるようになるとは思っていませんでしたので、予想を超えた成長でした。ちょっと出来過ぎですかね。でも菊江自身がプロでやるという強い気持ちを持っているので、菊江が頑張ってくればどんな形でもいいのかなと思うんです」と教え子の成長を誇らしげに、でも少し心配げに口にした。

菊江が「第二の故郷」と表現し、大学進学後も長期オフには『帰省』する南伊豆。この地にも菊江の人柄を愛し、応援している人たちがいる。数多の人に支えられた菊江龍の旅の終着点はまだ見えない。



◆菊江龍 [きくえ・とろう]
1992年10月29日生まれ、秋田県湯沢市出身。172センチ78キロ、右投右打。小学1年で野球を始め、湯沢南中では主に捕手。静岡県に移り住み、下田高校南伊豆分校で内野手と投手を兼任する。朝日大進学後、2年から投手に専念。常時140キロ前半を記録するサイドハンド。